

(様式例)

令和5年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

岐阜県立飛騨特別支援学校

学校番号	119
------	-----

自己評価

学校教育目標	「ひとりだちのできる子」の育成（自立と社会参加の力を育てる） （思いを伝える 自分も仲間も大切にしたい自分を目指す） ・生活自立（基本的な生活習慣の確立・基礎体力の向上・基礎学力の定着） ・社会自立（情緒のコントロール・コミュニケーションスキルの獲得・規範意識や危険回避能力の育成） ・職業自立（自己理解と行動の調整・働くことの意義や役割の理解・職業に対する理解や実地的な知識・技能・態度の習得）
--------	--

評価する領域・分野	「キャリア教育」（進路指導・関係機関との連携）
現状及びアンケートの結果分析等	・高等部では、保護者の願いやニーズを丁寧に聞き相談を行っているという項目では、肯定的な評価が高かった。 ・通信等での情報の発信や生徒の気持ちを進路指導に反映させているかという項目に関しては、約15%の保護者が「わからない」との評価だった。中でも、小学部の保護者の「わからない」という評価が高く、普段の学校生活とキャリア教育とが結びついていないことが分かった。 ・関係機関との連携について「わからない」との評価が多く、生徒自身や保護者が関係機関と直接関わる機会が少ないことが分かった。
今年度の具体的かつ明確な重点目標	・全校児童生徒並びに保護者に対するキャリア教育への理解の向上 ・当校の進路指導に関する情報の発信 ・保護者が福祉事業所等から直接情報を受ける場の設定
重点目標を達成するための校内組織体制	全校児童生徒並びに保護者に対するキャリア教育への理解向上 ・部主事、担任、進路支援部、教務部 進路指導に関する情報の発信 ・高等部、進路指導部、渉外部、研究研修部 保護者が福祉事業所から直接情報を受ける場の設定 ・進路支援部
目標の達成に必要な具体的な取組	・全学部において、連絡帳や懇談を利用してキャリア教育について情報提供し、進路について生徒自身や保護者のニーズを聞き取る。 ・進路通信、学部学級通信等により、各部の日々の取組がどのような力を育てるのかを保護者に周知する。 ・進路への意識を高め適性を見極めるため、1年生の段階から高等部生徒のアセスメントや現場実習を行う。 ・高等部の実習の様子をDVDに収め、各家庭に回覧し視聴する機会を設けた。 ・小中学部の児童生徒及び教員が、作業学習や販売に取り組む高等部生徒の姿を直接見学する機会を設け、「はたらく」ことへの意識を高める。 ・福祉事業所説明会を開催し、保護者が情報を得たり事業所と直接関わりをもったりする機会を作った。
達成度の判断・判定基準あるいは指標	・懇談時の保護者や生徒からの意見 ・進路通信の発行（年3回）、学部学級通信の発行（随時） ・学校運営協議会委員や地域外部の意見 ・小中学部の児童生徒の感想

	・学校評価アンケートの実施
取組状況・実践内容等	・進路通信に加え、学部通信や学校だよりでもキャリア教育につながる具体的な授業を取り上げ、その中で育てることができる力について、全保護者に周知を図った。 ・高等部では保護者だけでなく生徒本人とも懇談をもち、実習につなげるために思いを聞き取った。 ・小中学部の児童生徒が高等部の作業学習や販売活動の姿を見て、自分がやってみたいことを考えたり憧れの気持ちを抱いたりすることができた。 ・事業所説明会には小・中学部の保護者も参加し、直接話が聞けたことで理解が深まったとの感想が聞かれた。
評価の視点	評価
① 本校の職員が、キャリア教育について理解を深め、通信や連絡帳、懇談を通して本人や保護者への情報発信を行うことができたか。 ② 全学部の保護者が自分のこととして理解できるような働きかけができたか。 ③ キャリア教育の一環として、児童生徒が教育活動を通じて、就労観・勤労観を学ぶことができたか。 A 十分達成した、B おおむね達成した、C やや不十分、D 不十分	A B C D A B C D A B C D
成果・課題	総合評価
○早い段階から生徒が事業所と関わる機会を設け自分の適性やどのような事業所があるかを知ることができ、その上で担任と話し合う機会を作ること、希望や思いを踏まえて実習先などを決定することができた。 ○小学部の児童生徒が実際に高等部生徒の姿を見ることにより、「はたらく」ということを具体的に体感することができ、意欲を持ったり意識づけをしたりすることができた。 ○福祉事業所説明会は、保護者の進路に対する関心を高め、良い情報提供の場となった。 ▲全校に向けて進路通信を発行したが、小学部の保護者にとっては自分のお子さんの姿との結びつきが弱く、関係ないこととしてとらえてしまった。 ▲教員自身が、普段の学習活動に対してキャリア教育との結びつきを意識することが少なく、保護者への発信ができていない。 ▲保護者や生徒が直接関係機関とつながる機会が少なく、主体性をもって進路について考える意識が低い。 ▲教員がキャリア教育についての理解が深まっておらず、普段の学習活動が将来必要な力にどうつながるのかを見越した支援ができていない。	A B C D
来年度に向けての改善方策案	・キャリア教育に対する教員の意識の向上を図り保護者と連携して児童生徒の力を伸ばす。 ・教員の専門性を高め、日々の授業の充実を図る。 ・保護者生徒が直接関係機関とつながり、情報を得る機会 ・保護者の理解を図るための情報発信の工夫

学校関係者評価 (令和 5年 10月 17日実施)

意見・要望・評価等
・生徒が自分で実習先を選択できるよう、事業所の見学や説明を聞く機会を設けると良い。 ・幼少期から、社会生活で必要とされる力をつけるような支援をしてほしい。 ・自分の思いを自分で相手に伝えられるような支援をしてほしい。 ・失敗したり困ったりしたときにやり直したり周りの人に聞いたりする経験を学校にいるうちにしてほしい。

